國學院大學学術情報リポジトリ

境界に立つ知性：
大石千代子のサンパウロ体験、『輝ク』と「蝸牛」

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高橋, 大助, Takahashi, Daisuke
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000591

境界に立つ知性

―大石千代子のサンパウロ体験、『輝ク』と「蝸牛」―

高橋大助

はじめに

さまざまな可能性を秘めながらもその才能を成熟させるにふさわしい時代と環境を持たないままに終わってしまった[1]

尾形明子のこのことばは、作家としての大石千代子を的確に捉えている。ただ、大石の名が署名されたテクストには、書き手が翻弄されながら必死に対峙した「時代と環境」の痕跡に満ちている。その痕跡をたどることは、大石千代子という稀有な書き手を救い上げるだけでなく、近代日本を克服する手がかりをつかむことにつながるのである。

本稿では、大石にとって二度目のブラジル体験となるサンパウロ滞在がもたらした、長谷川時雨が主宰するリーフレット『輝ク』に寄せたテクストと、同時期、神近市子主宰の『婦人文藝』に掲載された小説「蝸牛」とを中心に分析したい。そこに大石千代子の特質が色濃く表れていると考えられるからである。

1 『輝ク』における大石千代子

1－1 長谷川時雨と大石千代子

長谷川時雨は自身が主宰する『女人藝術』に掲載した大石千代子の小説「第二世の群」を「本年の文壇においてもよき収獲の一ツと推賞してよい作品」と激賞した[2]。時雨は『女人藝術』に続いて主宰した『輝ク』でも、大石千代子に発表の場所を与えている。八年余にわたり全一〇二冊刊行されたこのメディアに、大石千代子は二七回執筆しているのである。これは「時雨の一〇四回は別格として、若林つや三五回」に次ぐ回数である[3]。しかし、そのテクストは、ほぼすべて文学作品ではない。これは専ら『輝ク』のメディアとしての特質によるものだろう。

一九三三（昭和八）年四月から、四一年一一月まで全一〇一号（途中号数の重複があるので、実際は一〇二号）。日中戦争の激化、非常時体制、そして太平洋戦争前夜までの時代の動きが、わずか四頁のリーフレットから伝わる。B5判（タブロイド判）、一頁に四百字詰原稿用紙で約七枚。全頁合わせても二十数枚に過ぎないリーフレットに、小説、劇作、随筆、評論、文芸批評、座談会、投稿、会員消息、海外情勢、時評と、実にさまざまな、しかも読みごたえのあるものがつめこまれている[4]。

誌面の「量」の問題もあろうが、むしろ「質」が大石に特異な役割を与えたのである。上記の分類に従えば、大石が主に担ったのは「海外情勢」に関する報告と批評であった。「第二世の群」について激賞する理由を「この大きな材料をこれだけにまとめるのは中々至難だ。認められてよいと思ふ」と時雨は述べた。「大きな材料」すなわち、ブラジルにおける一九三〇年革命（ヴァルガス革命）の際の日系二世労働者たちを描くことを可能にしたのは、大石の文学的才能と環境であった。一九三〇年、有力な州が拮抗し牽制しあう「第一共和制」から中央集権化した「ヴァルガスの国家」への移行が始まったこのとき、大石は外交官夫人として、リオデジャネイロの地に在ったのである。「第二世の群」の持つインパクトは、僅か数か月前に地球の反対側で起こった革命の実相を垣間見させたことにあるだろう。時雨にその意図があったかどうか不明だが、『輝ク』において、大石は、海外レポートを通じて、帝国主義を背景にした国際化が進む日本および日本人について「外部」から捉えなおすことになったのである。

1－2　サンパウロと排日問題

『輝ク』によると一九三三年二月一七日、リオデジャネイロから帰国した大石の歓迎会が行われるが、その半年後早くも洋上の人となり、サンパウロへと向かう[5]。同年十二月の『輝ク』（一〇号）には、大石の最初のレポートが載る。同じブラジル国内であっても、首都・リオデジャネイロと異なり「ポク〳〵と赭土がふめる」田舎のサンパウロは、日系移民の中心地であった[6]。興味深いのは、大石がこんな苦言を呈していることである。

豆腐屋、料理屋、おまんぢゆう屋、乾物屋、菓子屋、医者も日本人がゐて少々ウンザリしました。ロスアゼルスの日本人街程、溌溂とはいたしませんがどうもあんまり共喰いをする習癖はゾッといたしません。

「共喰い」という、あまり穏やかでない表現は、ブラジルの「排日問題」を論じたテクストの中でも使われ、海外移民の問題点の中心を大石がそこに見ていたことを示す。「こゝへ来て一層識りたいこと識つておかなければならないことがどつさりあるのに気づい」たと記す大石が、この滞在中に、ブラジル日系移民についての再検討を目論んでいたことは確かだろう。その意味では、訪伯直後の大石が目の当たりにする一連の出来事は、日系社会について考察を深める絶好の素材であった。

『ブラジル史』を表したボリス・ファウストによれば、一九三〇年、ブラジルで起こった革命は「いずれかの新しく登場した社会階級」が旧体制にとって代わるという種類のものではなかった[7]。当初から中央集権を目指すものの、「異なる展望」を抱く「社会的にも政治的にも多様な勢力からなっていた」ヴァルガスの政権基盤は安定したものとはいい難かった[8]。事実、サンパウロ州では内戦が勃発し、一九三二年七月には革命の火の手が上がった。同州の実権を握る民主党を冷遇したことに端を発する「サンパウロの戦争」は、三か月後連邦政府側の勝利に終わるものの、「州のエリートを無視できない」と認識したヴァルガスが、民主党に近い人物を執務官に任命し、「経済再調整」の政令を以て「不況にあえぐ農業者の債務を軽減」させ、事態を鎮静化した翌年八月、大石はサンパウロに降り立つのである[9]。一連の反革命的な動きを踏まえ、ヴァルガス政権は立憲体制への移行を目指し、憲法制定に着手するが、この憲法をめぐる議論は、移民社会に大きな影響を与えることになる。

後に発布される新憲法には民族主義が反映されたが、海外からの移民を制限する「外国移民二分制限法」はその代表例であった。新たな移民は、過去五〇年間で定住した者の総数二パーセント以下としたこの法案の議論を、大石は、排日問題として捉

え、「ブラジル便り」と題して正面から論じる。[10]「二分制限案」に見られる日系移民の排除は、日本人に「同化性」のないことを理由に挙げるが、背景にあるのは、北米同様「黄色人種に対する嫌悪」感だと大石は断じる。だが、より重要なのは、日本人の「同化性」について大石が述べるくだりである。

此処で生れ育つた第二世群には、あまりに日本人放れのした、殆ど日本人の国民性を失つた人々を多く見る点からいつても、同化性がないといふ結論は、否定される筈ですが、一般に何処（の）世界に行つても、味噌と醤油と漬物から解放されない民族は、水と油の融和性を欠いてゐると見られても致し方はありません。（略）日本人街にあれだけの日本商人が、共喰いをしてゐてそれで立派に生計を立ててゐる所をみても、日本人は祖国を忘れては暮らせない国民であることを感じます。

大石の指摘は、排日の表向きの根拠は一理あると述べるも同じである。その筆致は、日本人の特性に対して、内省的でありつつ、またある種の諦念を抱いてもいるかのようだ。排日運動の原因を、中央集権化を目指すヴァルガス政権のナショナリズムだけでなく、日系移民自体にも求める大石の姿勢は戦争前夜の日本において注目に値するだろう。

一方で、大石はブラジル国民を「個人的には全く善良な交際し易い」と称えるのだが、排日論に関しては「それ等の主張について行く一般の輿論が、どの程度に変化して行くかそれはなんとも結論が出来ません」と付言することを忘れない。善良なる個々人を巻き込んで行く作用力に大石は注意を払っているのである。[11]これに続くルポ「ブラジルの排日問題—サンパウロにて—」で、「ブラジルの有力な排日家」の論を詳細に紹介するのはそのためでもあるだろう。[12]

日本人は吾々伯人の中に在つて、次第に自己の祖国を造りつゝある。（略）諸種の農産物の生産に従事し、その生産物を自国船により祖国に送つてゐる。即ち彼ら日本人の為す処、之悉く自国の為であり、自己の子孫の為に過ぎぬ（略）今次の満州「××」に於て支那に対して宣戦の布告を為さず優秀なる武力の効果と無限の愛国心とを発揮して之を成就せる結果と云ひ、斯る恐るべき国民が来伯するに於ては国内労働者を駆逐するのみならず、遂ひにアマゾンをして満州化せしめるであらう。

わずか四頁の誌面の一頁分を占める大石の文章の、さらにその八割を占めて引用される「排日移民論」は、今日ではむしろ、太平洋戦争へと突入していく日本の姿を的確に捉えているよう

に読める。大石もあながち、故なし、とはしていないようだ。この排日移民論への評価は語らずに、「日本では、此度の排日移民問題がどの程度の反響を呼んでゐるのか知りませんが、合衆国の排日問題に照し合しても相当興ふかい問題」とだけつけ加えるのである。『輝ク』の読者に、世界における日本の位置を直視するよう求めているのだろう。[13]

此処にゐる日本人には、日本にゐて判らない、種々な重い無解決な「悩み」になやまされ苦しめられてゐる多くの人々がゐます。材料になるものは出来るだけ、うんと書いておき度いと存じます。

この決意は直接的には、小説「蝸牛」として結実するのだが、「此処にいる日本人」にこそ、日本が抱える問題の本質を見ることができると大石は直観していたに違いない。だから、この問題への取り組みは、大石に日本を相対化する視点をもたらすことにもなったのである。

1-3　境界から見た「二・二六」

帰国直前、今日誰もがこの国の歴史の転換点と捉える事件について記した「サンパウロから—感想二ツ—」には、大石の思考の一つの到達点を見ることができる。[14]

二・二六事件当時の日本の新聞を先日見ましたが、思つたよりも記事差止めをくつてゐるのに驚きました。あれではうつかりすると東京にすんでゐても、事件の内容を仲々に知り得ないのではないかと心細い気もいたしました。日本と恰度六時間おくれの当地では、廿六日の朝は廿五日の夜になるわけですが、それでも廿六日早朝には、東京からモスコー、ロンドン、にとんだニュースが、当地新聞に、デカデカと日本に革命起るといふセンセーショナルな見出しでかなり委しく名前なども、はつきりと出て居りました。

大石は「第二世の群」の中で、革命に際し、報道が機能せず、ブラジルの市民たちが他国からの情報でその成立を知る様子を描いているが、この未遂の「革命」にあっても報道が本来の機能を果たしていないことをまず指摘しているのである。[15]そのうえで大石は本国への「不安」を口にする。

外にゐていくらか客観的に祖国を眺める余裕が出来てゐるせいか、此頃の日本のめまぐるしい動きには、ひや〳〵とした不安ばかりを感じます　中に住んで、その空気を吸ひその中に生きてゐる人達の感じない不安でありませう。

「時局」へのこの踏み込んだ発言は、この時期の『輝ク』では異質なものであるようだ。尾形明子は「前半の『輝ク』に不

思議なほど時代の臭いがない」と述べる。確かに、二・二六事件以降の誌面を紐解くと、事件直後の四年三号（昭和一一年三月）に事件に関する詩と川柳、続く四号にも詩が掲載されるが、いずれも情緒的で出来事の本質を突くようなものとはいえない。『輝ク』には、事件を本格的に論じた批評の類はなく、森茉莉のエッセイ「戒厳令の銀座」（四年四号）が事件翌日の銀座をリアルに描写するのみである。事件当夜の情景が挿入される太田洋子の短編（五年四号）も含め、尾形はこう総括する。

いずれにしても事件のもつ意味、時代認識からは遠く、時雨の「如月（きさらぎ）は去つた。凛烈な早春だった。寒波は鋭く激しく肉迫した。稀（めづら）しい大雪は幾回か降り、その、ある日の雪天の暁には、血に記録される事変が、烈々と、厳かさをもつて人々の心を突いた。私たちはいづれもの犠牲者へ、深く深く額垂れるばかりだ」（四年三号）という感想が、おそらくは当時のインテリ層の典型だったのだろう。[16]

そうであれば、「インテリ層」の中でも大石のこのテクストは異彩を放っていたことになる。

深海は深い海ほど、表面どんな嵐が吹き狂つても、その底はゆるぎがない様に、日本といふ国はその海だといつてゐる人もあります。日本といふ一つの大きい国家を対照にした場合、此度の事件などは勿論、ただちよとした波紋を落す石の程度かも知れません。でも落ちた石は、どんなに小さくてもどんなに海が深くても海底に沈まなければならないとしたら、沈むといふそれだけで、海底に一つの動きを与えてゐないとは言ひ切れないのです。とても消極的な考へ方ですが、その海底がもつと大きく世界全国に通じてゐる場合、たつた一つの小石でさへ、どんなに大きい支配力を持つてゐるかも考へてみたりいたしました。

慎重な言い回しながら、日本の海外への進出を可能にしている世界的な変化とそのリスクとに目を凝らすよう『輝ク』の読者に求めている。このテクストを紡ぐ大石には、犠牲者の鎮魂では解決しえない問題が見えていたのである。大石の念頭に、世界的なナショナリズムの台頭があったのは、エッセイの終わりで、イタリアのエチオピア侵攻について言及されていることからもわかるだろう。サンパウロに最初に根付いたイタリア移民たちが戦勝祝いで大騒ぎする様子を伝えて、大石はこう述べる。

強国、弱国といふ問題よりも、此処には人種的に黒白といふ根強い闘争意識が、含まれてゐるだけ、長い歴史の終末図をみる様な、それが裸になつた人間の動物的な本能の、

浅ましい姿を見る様な不快な気持ちさへいたします。

大石は、お国自慢で済む素朴な民族主義を独裁国家建設の原動力としてしまう時代での、民衆をポピュリズムへと傾斜させる国家とメディアの共犯的関係に注意を払っていたようにも思われる。欧州ではこのとき、オリンピックを民族の祭典と捉えなおした国家社会主義者の元首が、己が理想の虚構世界を「第三帝国」として謳い上げようとしていたのである。

ところで、「小石」には、もう一つ、潜在させてあることがあると考えられる。書かずして伝えようとした内容は、帰国後、『輝ク』で行われた座談会「帰朝者を囲んで」での大石の発言からうかがい知ることができる。[17]

第二世達が四五年前までは、日本をいゝところだと云つても信じなかつたものです。テンから馬鹿にしてゐましたが、学校の先生が日本が世界的に進出して来た状態を話すやうになつてから、第二世達が非常に歓んで気持ちがすつかり違つて来たさうです。

満州事変を契機に高揚する日本国内のナショナリズムはブラジル日系移民社会に大きく影響し始めていた。根川幸男は、「一九二〇年代後半から一九三〇年代前半にかけて多くの日本人移民が入国した」ことが「サンパウロ市日系人の繁栄」をもたらした理由のひとつとする。[18]

この新移民のなかには、満州事変以降の日本のナショナリズムの影響を受けた者も多く含まれ、その影響下で発展した国粋主義的な言説も多く輸入された。そのため、日本人移民の間では遠隔地ナショナリズムへの傾斜から、子弟の日本語教育重視の傾向が生まれた。一方、三〇年代に入ってからは、ヴァルガス政権のナショナリズム政策による同化圧力によって、移民子弟の間でポルトガル語が優勢言語となる傾向はさらに強くなった。日系子弟の言語は二つのナショナリズムのはざまで動揺することになった。

こうした潮流にあって、日系移民二世が自己存在を問う事件が起こる。「菊花事件」と呼ばれるこの出来事の中心となるのは、「一九三四年一〇月、二世学生の親睦と団結を目的にサンパウロで結成された日系学生のエスニック組織」の「聖市学生連盟」である。[19] 連盟は「サンパウロ市の中高等機関に学ぶ二世学生の組織と啓蒙に努め」、二つの機関紙、主に日本語表記を用いる『学友』とポルトガル語の『GAKUSEI』を発行していたが、国立国会図書館がウェブ上に展開する「電子展示会」の一つ「ブラジル移民の百年」によれば、一九三六年、連盟の創立メンバーでもある下元健郎が『学友』に寄せた「我等の心情」

が「不敬」に当たるとして騒ぎとなり、「サンパウロ日本人学校父兄会を通じて学資補助を開始していた」総領事館は「これを問題として、日本政府から学資を受けている者に、聖市邦人学生連盟を脱退せよと申しつけ」る事態となったのである。[20]「不敬」とされた該当箇所の翻訳（原典はポルトガル語表記）を引用してみる。

　如何にして我等の父兄の祖国日本を我々は愛することが出来るか。遠く離れて目に見ることの出来ぬ国土の為に如何にして愛国心が生じ得るのか。我々は父兄の祖国に対して、出来得る限りの尊敬を持つことが出来る。しかしながら、菊花の国の為に愛国心は断じて起り得ないのである。（略）我等はブラジルが若し我等の血を必要とするならば、何時であらうともブラジルの為に流す用意が出来上つてゐるのだ。[21]

この事件はサンパウロ人文科学研究所編纂の『ブラジル日本移民史年表』にも「二世がブラジルを母国と認めた最初の記録」と注記されている。[22]しかし、大石のテクストに事件の記述を見出すことはできない。下元の文章が載る『学友』第四号の表紙の、昭和一一（一九三六）年八月とある発行年月を根拠とすれば、同年八月一六日に離伯した大石がこの出来事に直接立ち会った可能性は低いといえよう。しかし、サンパウロの総領事館を巻き込んだこの事件が大使館員の妻の耳に入らないとは思われない。そもそも「菊花事件」は、サンパウロ日系人社会を巻き込む世界的な潮流が生んだことであり、突発的な出来事ではない。いずれにしても、「此処にいる日本人」を深く知りたいと考えていた大石が、日系社会で二つのナショナリズムがせめぎあう様子に無関心でいられたとは考えられないのである。大石の四女、椿原頌子は母の戦前の執筆活動について「外交官の妻という立場で果たして自由に作品が発表されたのか」と大石のテクストに環境からの「プレッシャー」を読むよう示唆する。[23]外交官夫人という立場が、この問題を扱うことを困難にしていたことは想像に難くない。

　そうであれば、「小石」はまた別の意味を持ってくる。二・二六事件及びその首謀者たる青年たちを指すこのことばは、同時に、ブラジルの日系二世青年たちのことも指し示すのではないか。「海底がもつと大きく世界全国に通じてゐる」という表現には、国を問わず、青年たちが自己存在の確立の過程で、ナショナリズムへと巻き込まれることへの大石の危惧を示しているようにも思われるのである。大石は、二・二六事件を世界情勢のうちにとらえている。それは、日系移民二世の現状を見つ

めることで可能となったのではないか。大石はこの前年『輝ク』に寄せた「山羊の乳売り」（二八号、一九三五（昭和一〇）年七月）のなかで、「伝統を持つた国を背景にしない」同世代の二世たちに「ぴつたりと来ない変な雰囲気を感じ」ると述べる。この他者として二世の発見は、かれらが存在する世界への視角を大石にもたらしたに違いない。日伯の境界に在って世界に異なる容貌を見る日系二世を傍らに意識しながら眺めるとき、二・二六事件が「ゆるぎのない」はずのものへの不安を掻き立てる出来事として大石の目には映ったのだろう。その視座を手にした大石は、日本の境界、国と国の際に立つことになったのである。大石を境界へと導いた二世の他者性は小説「蝸牛」のテーマとなる。そこでは小説という方法でこそ可能となる探求が試みられるのである。

2「蝸牛」

2-1　構成

『輝ク』の時代、大石にはもう一つ発表の場があった。神近市子が主宰する『婦人文藝』である。[24] サンパウロ滞在中の一九三六年七月に同誌に掲載された「蝸牛」は、区切りの記号（×印）で四つのシークエンスに分けられ、いずれも、サンパウロが舞台となり、第三シークエンスまでは、「亜細亜移民二分制限法案」が議会を通過した一九三四年五月二四日の出来事であり、最後のシークエンスのみ、数か月後のこととと推測される。[25] 四つのシークエンスはそれぞれ、視点人物である聖一の「自室」、「日本人街（コンデ街）」と「大学」及び聖一の「家の前」、聖一の家の「リビング」、「リビング」と「自室」で展開され、主人公の移動は少なく、事件らしい事件も起こらない。「二分制限法」通過や妹の失恋といった出来事も、街の情景も、聖一の思考の材料として語られており、その意味で、聖一は自己と自己を取り巻く世界の関係を読み、語る存在として小説に登場しているのである。

×

妹の口から「二分制限法」の通過が知らされる最初のシークエンスでは、聖一が「日本人ではない。だが決して、純粋なブラジル人でもあり得ない」という発見に至る経緯が語られる。

聖一は、幼少期には、移民一世の両親から「日本国民の子」であることを求められ、日本語を「一生懸命で勉強し」、少年期には「ブラジル人の子供と遊んでゐる時も、学校に行つても」常に「自分一人が、他を抜いて、すぐれた、偉大な民族である

と云ふ、大きい自負と満足を」実感するようになった。少年期までのかれにとって「日本」ということばは、将来への期待を意味する「夢」と同義だったのである。しかし、青年期、「新しく展びてくる知識欲」が聖一を夢から呼び醒ます。

夢は夢として、いつの間にか、意識の下積ふかく押し込む様になり、現在、彼の生を受けてゐる、活々とした現実の環境から働きかける、目にふれ、耳に聞こえる知識を、夢よりは確かにはつきりと、手で掴める溌溂とした知識を、求めて止まなくなつた。

この「成長」は聖一のアイデンティティを揺るがす。聖一は、過失の責任を取って自殺した者に正義を認める日本人と「死は最も卑怯な、逃避場でしかない」と思う自身との懸隔に気づき、自分が「日本人の国民性、父や母を育てた、伝統的な日本精神」を受け継いではいなかったことに愕然となるのである。「ブラジルに去勢された俺達の意識は、ブラジル人以外の何者でもない」との結論をえながら、「幼時から、日本人であらうとした意欲と、人種的な外貌が、悪夢の様に、消す力もない根強さで残つてゐる」聖一は、日伯両文化の境界線に在る不安と苦悩とに苛まれる。

×

視点人物が抱える葛藤を明らかにしたうえで、語りは、「コンデ・サルゼーダス街」へと移動する。不潔で雑然とした生活感あふれる日本街がルポルタージュ映像のように語られたのち視点人物の批評が始まる。

日本人同志で共喰ひをして、限られたそれだけの社会のみで、営業している日本人商人達には、同じ東洋人でも、支那人やトルコ人の持つ、世界を目的に闊ふところの、大陸性の根強い忍従と、飛躍的な、生活力への認識が欠けてゐる。

『輝ク』における大石の日系移民観が、当の日系二世を通じて語られることで説得力を増すことになるが、より効果的なのは、聖一が「ふつと思い出した」排日論を語る場面であろう。

此処に生まれた、立派なブラジル人である彼らの子供にも、日本国民としての意識を植えつけるために、日本の学問をさせ日本のみに通用する道徳を教え、微塵も、ブラジル国民としての教育を施そうとしない

聖一が「その論説を全然、否定する事は出来なかつた」と語られることで、日本の遠隔地ナショナリズムによる弊害は明確になる。同時に、政策の効果という点で問題を抱えていることも、「親達の意志のまゝに日本人になり切れない」聖一の存在自体

が示すのである。ところが、ブラジル人学生に「二分制限法」問題で挑発をされた聖一は自己の中に日本の存在を意識する。[26] ブラジルと日本との境界線上に在る自己存在を改めて突き付けられ、聖一の苦悩は深まる。

×

その晩、夕食後、「二分制限案」が家族の話題となり、移民からその監督者、移民会社の社員を経て、いまでは支配人にまで上り詰めた父は、「暫くの間に、日本もえらくなつた」と述懐する。母もその苦労を振り返るように「奥地でさへ、六七家族よれば必ず、町から、日本人の先生を呼んで、日本の勉強を子供達にさせるんですもの」「親が、こんなに一生懸命で、貴方達に、日本語の勉強をさせるのは、貴方達を、日本国民の子として、立派に育て上げたい為めですよ」と語る。母のこの遠隔地ナショナリズムに聖一は反論する。

だけどね、マヽ僕らは、此処に生れて、ブラジル国民として、兵隊にもならなければならず、将来、ブラジル人として、生活してゆかねばならない。マヽ達が恩恵を受けた日本を、いつまでも愛してゐる様に、僕らが此の国を愛してはいけないんですか、何故、僕らは、ブラジル国民であつてはいけなんですか

このやり取りは日系移民社会で先鋭化する二つのナショナリズムの対立を思い起こさせる。ここでの聖一に菊花事件の下元健郎の姿を重ね見ることは可能だろう。聖一は「我等の心情」宛ら母にこう言い放つ。

僕たちに、いくら日本の本を読ませたつて、書かせたつて、読み書きだけで、人間の国民性を作れるものだと思つたら大間違ひですよ。僕らには、日本の国家から働きかける、空気といふものがないんです。根本の伝統的な日本精神の無いところで、どうして完全な日本人が出来るんです？

自身を構成する半面である、「殆ど日本人の国民性を失つた人々」の立場から問いかける聖一に、父は「開拓者」としての運命を生きるよう勧める。

俺達は、日本人の仕事の上での開拓者だつたが、その子のお前達は、此度は、第二世といふ、社会制度の開拓者だよ、お前に法科を選ばしたのは、俺に、その考へがあつたからだ。俺達、日本人ではやれない仕事、白人に委されない仕事、第二世でなければやれない仕事、それがきつとある筈だ。

かれは息子が、ブラジル人でも日本人でもない存在に耐えて、その存在を損ねるような社会自体を変革していく強度を持つこ

とを願っている。[27] 二世である息子を〈他者〉として捉え、自ら居場所を切り開くよう求めるのである。しかし、この父親に、聖一は自分への深い愛情を認めながらも、肯くことができない。

第二世としての使命、などと云ふ、甘い感激など、微塵も感ずる事ができない。彼より、二三年先に大学を出た第二世達が、何処にも就職の口がなく、日本系である、と云ふ理由だけに、断られた例を知つてゐる。

二世の現状を見据えることができず、「理想主義的な単純さ」で導こうとする父は、聖一には羅針盤とはならなかった。

×

聖一に啓示を与えるのは、最後のシークエンスで、子どもたちに他者性を認めざるをえなくなった母の嘆きである。聖一家族と同居していた日本人男性への失恋を契機に聖書を紐解き「お寺参り」をするようになった娘の奈美からも「マ、達が、日本人だ、日本人だつて、私を欺すから、私は本当にさうかと思つたのに、人は、私をさう見てくれないぢやない」と糾された母は、自身を啄木鳥に托卵され鶯になぞらえる。[28] 羽化した子どもは「本性を表はして、森の奥ふかく」飛び去ってしまう。

親鶯はそれが他人の仔であることも知らず、子を探して泣くと云ふぢやありませんか、全く、私達は、この可哀想な、親鶯と、ちつとも変りませんよ。

母のこの嘆きは、「親達をこんなに嘆かせ苦しめ」「彼自身を、苦悶の底につき落とすものが、何であらうか」という問いへと聖一を導く。「真黒い翼を拡げ、毒ガスの様な息を吐いて」迫る「異様な化け物」に喩えたそれを、聖一はこういいかえる。

濁つた、粘液の様に重たるい毒ガス、彼らの体が腐敗し、爛れてしまふまでは、決して、その排泄を止め様としない、大きい、底知れない二つの坩堝、聖一は立ちつくし、肩をしつかりと抱いて、二つの国家といふ坩堝からたち上る、毒ガスの苦しさに目を掩ふのであつた。

二つの国家から立上るものが、第一次世界大戦で使われたマスタードガスを連想させるのも興味深いが、この比喩の衝撃は、国家に食い物にされる移民というイメージを植えつけるところである。夢に描いた日本も、生まれ育ったブラジルも、同じ落とし穴へとかれを追い込む。聖一は、母の比喩を引き受けながら、自分は「啄木鳥」ではなく「重い殻」を背に「意気地なく匍ひ廻つてゆく」「蝸牛」だとする。

一生涯、取り除けない固い殻を背負つて、目のない蝸牛は、只、二本の触角だけを頼りに、葉陰から葉陰へと、彼の生活を求めて歩いてゆく。

外敵にあふと、意気地なく全身を殻の中に引つこめ、又、たゆみのない努力で、目的に対つて、のろ〳〵と歩いてゆくかたつむり、蝸牛にも、蝸牛の意志がある。

タイトルの意味がここで明かされる。生まれながらにしてブラジルと日本の境界線上に立つ「開拓者」として生きることを運命づけられた者の真の姿が示されるのである。生得的な重い殻はかれの動きを拘束し、しかし、その殻のおかげでかれはなんとか世界を生き抜くことができる。存在の基盤が存在を損ねる。殻によるダブルバインドがここに成り立つ。この発見は、聖一を「絶望と悲哀の波」へと放り込む。窓の外の夜霧に向け「俺を救ふものは何だ！　俺を救ふものは誰だ！」と叫び続ける聖一を残して語りは閉じられる。

ここまで、語られることに注目して「蝸牛」を読んでみたが、次節では、それがどう語られているかに注目したい。

2-2　語り

先にも述べたように、この小説は聖一を視点に据えた三人称の語りとなっている。語りは聖一の心の内にも踏み込み描写する点で神の位置にあるが、同時に翻訳者という立場にもある。というのも、聖一は「サンパウロ、法科大学の二年生にもなりながら」「日本の中学の、二年生の国語さえ難解」とされるからだ。当時、サンパウロのような都市在住の日系二世は、生活上の必要からごく普通にポルトガル語と日本語の二重言語状態にあったとされる[29]。聖一もその例外でないうえに、高等教育の受容者として、高度な思考の際には専らポルトガル語が選択されたであろうことを語りは示唆するのである。すなわち、自己存在を問う、というような場合にはポルトガル語優位であったと、読者は想定しなければならない。二重言語によって織り成された聖一という存在はまず、次のようなエクリチュールによって明瞭に描き出される。

此の南国に生れて、一度も見た事のない雪の中を、ゲタと云ふ、二枚の歯のある木靴で歩くと云ふ日本、春になると、咲き乱れた桜花（セレージヤ）の下で、花を見ながら、ご馳走をたべて踊り狂ふと云ふ日本、

下駄のくだりも聖一が日本文化から遠く離れて在ることを示すものだが、「桜花（セレージヤ）」は聖一そのものである。日本の国や文化を象徴する桜を、晩春のブラジルで白い小さな花を咲かせ、瑞々しい果実をつけるセレージャに託して理解する聖一を、この表記は体現するのである。さらに、自己存在を問うような高度な思考においてポルトガル語が重要な役割を果たすことは、聖一

の口から発せられたことばを語る、次のエクリチュールから明らかになる。

小さい時から、親の考へ方に影響（インフルエンシア）されて、僕らは妖怪（ファンタズマ）の様に、日本人でもなければブラジル人でもない、変な人間でしかないんですよ、此処に生まれて野育ちにブラジル人化した、日本語のわからない第二世の方が、その点では、僕らより倖せだとさへ思ふ

一世の両親と日本人である同居人・戸澤を前にしてのこの発語は、日本語によるものと断じてよい。[30] しかし、「影響（インフルエンシア）」という表記は、聖一の発語の単なる翻訳ではない。幼少期、日本人であると錯覚した原因を、青年になってポルトガル語によって分析し理解したという過程そのものがこの表記となっているのである。さらに、ファンタズマ（fantasma）は、妖怪というよりは亡霊だが、幻想や妄想の意でもあるこのことばは、「日本人でもなければブラジル人でもない」いわば虚構的な存在として自己を捉える聖一が自称として用いるのに相応しいだろう。その幻想的な存在が、他者である両親や戸澤には、理解しえない妖怪の類であることを、この表記は明確に示すのである。

だが、理解しえない、のは、「蝸牛」の語りを司るものも同じなのもしれない。日本語で行われる語りでは、聖一の内面は翻訳として読者に提示される。翻訳であるならば、そこに越えがたい懸隔の存在を想定することになる。ことばが使われる以上、同一言語内のことであっても、内面とその表現には懸隔が認められよう。しかし、「蝸牛」の語りが持つ翻訳という属性によって、聖一の他者性はより明瞭になるのである。安易な理解を諫め、躊躇を生むこの語りの構造自体が、二重言語に生きる二世の抱える問題の難しさを体現しているのだ。だから、語られる聖一を読み解くには、語りの特質の検討が同時に要請される。ルビの分析はそのために行ったが、「蝸牛」の語りは、二重言語生活者を語る資格を持つと判断することができるだろう。しかし、「蝸牛」は、創作集『山に生きる人々』収録に際し、「鶯と蝸牛」として改稿され、その結果、この「資格」が放棄されてしまう。

最後に、改稿がはらむ問題について、考察したい。

2－3　改稿

2－3－1　「蝸牛」から「鶯と蝸牛」へ

『創作集　山に生きる人々』は一九四〇（昭和一五）年九月、前年五月に出版され芥川賞候補ともなった『ベンケット移民』に続く、大石二冊目の単行本である。[31] この短編集については、

書名にもなった短編「山に生きる人々」の分析を中心に刊行の背景にも言及した金子聖奈の論考があり、付け加えることは多くない。ただ、「鶯と蝸牛」と「蝸牛」と相違の検討は金子の見解の補完ともなるだろう[32]。

「鶯と蝸牛」では、「蝸牛」で啄木鳥とされた托卵する鳥を鶯に正すなど、明らかな錯誤の訂正を除き、二つ大きな変更がある。一つはルビの省略であり、先に分析した三つの熟語はすべて省略されている。この変更によって、翻訳の向こう側を想起させる契機が失われる。今一つ大きな変更は、ラストシーンにおける書き換えである。「鶯と蝸牛」では、夜光花の匂う窓の外の夜霧に向かって聖一はこう叫ぶ。

どんなことをしても、こいつを引き貫き生き抜かねば、親達を救ひ、俺を立ち直させる道はないのだ。蝸牛になつても、俺は生きる！

生きることへの決意が宣言されるこのシーンでは、「蝸牛」とは異なる聖一が生まれたことを意味するだろう。先に見たように、「蝸牛」の聖一は、妖怪（ファンタズマ）たるやりきれなさを世界に投げつけるだけであった。ブラジル人と日本人という二項対立の壁の前でただ立ち竦んでいた。二項対立の原因である制度としての国家への問いはまだなかった。その意味では、プロレタリアとして、制度への戦いを意欲して終わる「第二世の群」の登場人物たちから、後退したところにいるのかもしれない。それでも、聖一は、まだ問いの中に在る。何が、誰が、この世界の矛盾を変えるのか。聖一はそれを問う存在として語り終えられる。対して、「鶯と蝸牛」の主人公は、「蝸牛」であることを引き受け、その殻を引き抜いても生き抜くと決意する。が、同時に、取り巻く世界への問いは、放棄される。蝸牛として這うことを要求する世界をそのまま受け入れるのである。ここにも「プレッシャー」の残響を聞き取ることになるだろう。

2-3-2　近藤春雄と大石千代子

『山に生きる人々』は、「海外発展と開拓事業」という国策に寄与する目的を持つ「開拓文藝選書」の一冊として刊行されるが、金子聖奈は前出の論考で「開拓文藝選書」の執筆者が「大陸開拓文藝懇話会」のメンバーで占められ、大石のもの以外は、「旧満州を舞台にするか、旧満州の開拓へと臨んでいく人々を描いている」ことを明らかにした。金子は「選書」へ大石が招かれた理由を、「選書」の側の「フィリピンを強烈に欲望する意識」に求め、そのうえで、小説「山に生きる人々」を「「海外発展」や「重要国策」の肯定と否認とを同時に抱えている」「反

語的」なテクストと捉えて、「選書」の文脈からの逸脱を読む。[33] しかし、困難を抱える開拓移民二世がその地で生き抜くことを決意する話へと書き換えられた「鶯と蝸牛」には、「海外発展と開拓事業」という選書の謳い文句への近接を見ることになるだろう。巻末に掲載された「創作ノート」では「山に生きる人々」に多くの言が費やされ、この小説（と登場人物マサ子）への大石の自負と愛着とが伺われるが、「鶯と蝸牛」への言及はみられない。ただ、創作ノートでの以下のことばには注目すべきだろう。

この十二三年の間、何べんか一二年づつ日本を留守にして帰つてきてみると、その度に、文学の上に異変がきてゐる。文学の異変ではなく、文壇の、或いはジャーナリズムの主張の異変である。

移民文学という名称が悪いといふわけではない。簡単に、取扱はれる素材を見たゞけで、そこに貼りつけるレッテルが気になる。

文学の主張は常に真直ぐだ。選ぶ材料は何だってい、わけである。

文学がジャーナリズムを引具して行くのではなくて、反対の現象しか目に映らない日本の文壇はおかしなところだと思ふ。

時代を生きていく文学者が、ジャーナリズムに引きづられるといふことは、社会機構の中にも何か欠陥があるのか、私には、何べん聞いても、そのところがよく解らない。

大石は「移民文学」というカテゴリー化を疑問視し、推し進めるメディアへの警戒感を隠そうとはしない。「開拓文藝選書」に載せるには些か穏当さに欠けると囁かれそうなこの文章を記した大石の脳裏には、一人の男の姿があったのかもしれない。

「大陸開拓文藝懇話会」のメンバーに近藤春雄の名がある。『輝ク』の最終号に甥として時雨の追悼文を寄せるこの男は、ナチスドイツに文化政策を学び、その紹介と日本への応用を画策した人物である。[34]『輝ク』への初登場の際には「外務省の」と冠される近藤は、「大陸開拓文藝懇話会」の発会式（一九三九年二月四日）の翌月、拓務省の外郭団体が発行する『海を越えて』（二巻三号）に会の意義と活動目標などを記した「大陸開拓文藝懇話会について」という一文を載せ、その中で大石を礼賛する。[35]

大石千代子氏の如く、外交官夫人として、ブラジル在住七年余に及び、現地生活の体験を基礎に、「彼方への道」「明日へ行く者」「青い風」「蝸牛」等々の作品を発表されてゐ

る閨秀移民文学作家の参加は、必ずや、他山の石として、大陸開拓文芸への交流的効果を期待し得るものと信じてゐる。

『輝ク』の周辺に存在し、外務省出身で拓務省に出入りする近藤は以前から大石を知っていたに違いない。大石の「大陸開拓文藝懇話会」や「開拓文藝選書」への参加の道筋を近藤がつけたと見ても大過ないだろう。大石はその招きに応じながらも、一線を画し、踏み止まろうとする。金子が読み解いたように「山に生きる人々」には踏み止まる大石の姿がある。一方、「鶯と蝸牛」には近藤が体現する時代の要請に抗しきれない大石の姿を見ることになるのだろうか。

2-3-3　境界線上の知性

「鶯と蝸牛」への改訂で、大石が手放さなかったことばが一つある。「日雇の子（カマラーダ）」というその表記は、小説の冒頭で、微睡む聖一が幼き日を夢に見るシーンで使用される。「白馬にまたがり、颯爽と」走る自分に、黒人の子ども「ジヨゼエ」が伴走する夢は、差別にあまりに無神経でいられた季節に、「ジヨゼエ」とともに在ったときの喜びを聖一に蘇らせる。夢からの覚醒は、その季節が過ぎ去ったユートピアでしかないと、聖一に告げるだろう。間もなく、妹の声によって、聖一は二つの国家に宙づりにされた苦悩へと引き戻されるのである。移民の耕地では、日雇い労働者をカマラーダと呼び習わしたが、この語は、仲間や同志を意味する「camarada」を想起させる。大人たちにとっては微妙な影を落とすこのことばが、聖一には「ジヨゼエ」という相棒のいた世界の記憶と結びつくのである。

語りが進み、記憶を彩るノスタルジーから放擲されて境界線上の存在であることを自覚した二人の聖一のうち、ひとりは、制度としての国家を問い、いまひとりは、その制度の中で生き抜こうと決意する。しかし、かれらには文化を横断して「ジヨゼエ」とともにあった世界での体験が刻まれている。この体験に目を凝らし、横断の意味を知る可能性を、どちらの聖一もまだ手にしているのである。蝸牛を強いる世界を問う者はもとより、蝸牛として生きる者も、殻を見失うのではなく、自ら脱ぐのだとしたら、その過程で、境界に存する我に再び向き合うことになる。そのとき、夢が継ぐカマラーダの記憶が、我の生るべき世界を想起する契機となりうるのである。テクストの始まりに何気なく置かれたこのエクリチュールがある限り、二つのテクストの中の聖一はともに、境界を横断してオルタナティブな世界を実現させる知性の獲得を予感させる存在であり続ける。

その姿に、作家・大石千代子を重ねることは許されるに違いない。

注

（1）『『輝ク』の時代　長谷川時雨とその周辺』（ドメス出版、一九九三年九月）、五二頁。尾形は同書の「Ⅰ『輝ク』創刊第三章『女人藝術』を継いで」において「大石千代子」という節を設け、大石の軌跡を紹介しながら評価を行っている。

（2）「第二世の群」は、『女人藝術』の四巻七号（一九三一（昭和六）年七月）と四巻一二号に分載。本文中の時雨のことばは一二号の「編集後記」に掲載されている。なお、「第二世の群」の引用はすべて『女人藝術』（復刻版、龍渓書舎、一九八一年五月）に拠った。引用に際し、漢字は新字に改め、仮名遣いはそのままとし、ルビは省略した。

（3）注1前掲書、四八頁。

（4）注1前掲書、一二頁。

（5）「ブラジルから帰朝された大石千代子氏をかこんで歓迎会をひらき、ブラジルの風物文化のみやげ話しき、ながら雪の夜の更けるのを忘れた」（『輝ク』一号、一九三三（昭和八）年四月）、「七月一七日、輝く（ママ）会例会を近くサンパウロに行く大石千代子氏の送別会」（『輝ク』六号、一九三三（昭和八）年八月）、「★大石千代子八月一四日横浜出帆サンパウロへ」（『輝ク』六号）

以下『輝ク』からの引用はすべて『輝ク第1巻』（復刻版、不二出版、一九八八年一二月）に拠った。引用に際し、漢字は新字に改め、仮名遣いはそのままとし、ルビは一部を除き省略した。

（6）「サンパウロより」（『輝ク』一〇号（一九三三（昭和八）年一二月）

（7）『ブラジル史』（鈴木茂訳、明石書店、二〇〇八年六月）。二七四頁

（8）注7前掲書、二七五頁。

（9）注7前掲書。二八五～二九二頁。

（10）『輝ク』一五号（一九三四（昭和九）年五月）

（11）大石は先に「第二世の群」（『女人藝術』四巻一二号）の中で、熱狂し、大勢に流されてゆく者たちを否定的に描き出している。

　××軍（原文伏字）にさへ全然好意を持たなかつた民衆の中にも、此の不思議な戦勝気分に騙られて、一大事業を完成させた××軍首領に、ありだけの賞賛を送つた奴らがあつた。政府系の大小七新聞社（略）及び雑誌社等が、熱狂したそれらのてあいに依つて焼き討ちされた。いつの場合に於ても此の種の民衆は愚かな烏合の衆であつた。潮流の方向に自己を失つて付随してゆく。

（12）『輝ク』一六号（一九三四（昭和九）年六月）

（13）二分制限案通過後に書かれた「セテ・デセンブレロ」（『輝ク』二〇号、一九三四年一一月）においても「根本的に、日本人が何処に行つても嫌はれるその原因から考へ直す必要をさえ認めます。それは日本人一般が海外進出と共にその責任を背負つたものとして、個人的に善処する生活意識を持つ必要があると思ひます」と「日本人」自体を問うことを求めている。

（14）『輝ク』四二号（一九三六（昭和一一）年九月）

（15）『女人藝術』四巻一二号掲載の「第二世の群」後編には以下の様な記述がある。

「オ、ジヨルナル」「エスケルダ」等の反政府派の新聞社主筆記者は既に監禁されて、記事の指止めを食つた新聞の多くは明かに事態を報道する事は不可能だつた」「（一〇月）一三日、アルゼンチンより伝る所に依れば、南大河州（リオグランデ・ドゥ・スール）に於ては、革命政府が樹立され」「一五日、ア

ルゼンチンよりの報道に依れば、ブラジル連邦二十州の内十二州は革命軍に投じた」

(16) 注1前掲書、一二一頁。

(17) 『輝ク』四八号（一九三六（昭和一二）年二月）所収。なお、四九号に「続稿」として続きが掲載されている。

(18) 『ブラジル日系移民の教育史』（みすず書房、二〇一六年一〇月）、三二五頁。

(19) 注18前掲書、三一四頁。

(20) 「ブラジル移民の百年」（https://www.ndl.go.jp/brasil/greetings.html）へ「第五章ナショナリズムの昂揚と日本人移民の排斥（二節）日本語教育の禁止（3）二世の成長」（https://www.ndl.go.jp/brasil/s5/s5_1.html）へ「二世のブラジル人としての自覚」（https://www.ndl.go.jp/brasil/data/R/058/058-001r.html）

(21) 「下元健郎「我等の心情」『学友』第4号　一九三六（昭和一一）年八月」（https://www.ndl.go.jp/brasil/text/t078.html）

(22) 無明舎出版、一九九七年四月。菊花事件の概要が同書八三頁「2世と不敬事件」として記載されている。

(23) 著者が椿原氏より直接いただいた手紙による。

(24) 黒澤亜希子は復刻版『婦人文藝』に付された解説で、「昭和初年代の女性主宰の先行文芸誌の流れを受け継ぎ、プロレタリア文学運動解体後のいわゆる「文芸復興」の短い時期に、多くの女性作家、文筆家に表現の場を与えた（『『婦人文藝』解説・総目次・索引』（一九八七年七月、不二出版）所収）」と述べる。

　大石は同誌に、「青い風」（二巻二号、一九三五年二月）、「蝸牛」（三巻七号、一九三六年七月）、「胎動」（四巻一号、一九三七年一月）、「明暗」（四巻七号、一九三七年七月）の四編の小説と三篇のエッセイを寄せ、グラビアページにも一度登場している。すべてブラジルに材を取ったもので、当時の日本とブラジルの関係性を理解する手立てともなる。以下「蝸牛」の引用は『婦人文藝』（復刻版、不二出版、一九八七年一〇月）に拠った。引用に際し、漢字は新字に改め、仮名遣いはそのままとし、ルビは分析に必要な個所のみ残して省略した。

(25) 六月に行われる「サンジョアン祭り」が過去のこととして語られる第四のシークエンスは、夜霧ととも香る「夜光花」が、ブラジルに多いニオイマツリハナだとすれば、七月から八月の出来事と推測される。

(26) 「オイ、二分制限案通つたぜ、どうしたい、君主国の紳士、顔の黄色いだけが能ぢやあるまい、聯合艦隊を率ひて、お次は、武力で来る番ぢやねいのかい、えゝ?!」

　それを聞いた瞬間「こん畜生」と、撲りつけたい衝動を感じ、その憤怒には、自分を侮辱された怒りよりも、日本を侮辱された憤りの方が強かつた—。

(27) 後に日系弁護士となった下元健郎はブラジルで「第二世といふ、社会制度の開拓者」として活躍する。そのこと自体は偶然にほかならないだろうが、大石が当時の日系社会の動向を的確につかんでいた証拠とはなるだろう。

(28) 通常、啄木鳥が鶯に托卵することはない。「鶯と蝸牛」では「杜鵑」と書き改められている。

(29) 「ポルトガル語話者との接触や必要性の高さ、生活様式の多様さから、一九二〇年代から三〇年代のサンパウロ市日系コミュニティにはさまざまなレベルの二言語・二文化状況が成立していたと考えられる。特に、日系子弟たちは日本語が第一言語として確立する前から、ブラジル人や非日系移民子弟と接触した。」（注18前掲書。三二二、三二三頁）

(30) 注18前掲書では、外ではポルトガル語、家では日本語を使用したとの証言が紹介されている（三二六頁）。

(31) 洛陽書院から刊行された同書には、フィリピンを舞台にした「山に生

きる人々」、「安住影あり」、ブラジル物の「鶯と蝸牛」、「相克」の四つの短編と二〇頁を越える「創作ノート」が収録された。「創作ノート」は、同じ選書の第一弾として刊行された『大陸航路』（近藤春雄）においても、一八頁に渡り掲載されており、この「選書」を特徴づけるものかもしれない。

(32) 「反語をよぶ〈フィリピン〉と移民」—大石千代子「山に生きる人々」論」（『繡　第三二号』（繡の会、二〇二〇年三月））
金子は「山に生きる人々」の精緻な分析を通じて、同じフィリピン物である「『ベンケット移民』の評価により」「「ナショナリズム」の文学者と等閑視されてきた大石」に異なる容貌を見出している。『ベンケット移民』が無自覚のうちにナショナリズムに寄与した原因は、「聞き書き」という取材方法に求めることができるが改めて論じたい。

(33) 注32前掲論、一一四、一一五頁。

(34) 近藤は大陸開拓文藝懇話会の立ち上げに関わりながら、ナチスの文化政策を紹介した『ナチスの文化統制』（一九三四（昭和一四）年四月岡倉書房）を著し、翌年には日本への応用を説く『文化政策論』（一九三五（昭和一五）年九月三笠書房）を上梓する。他にドイツ訪問直後に書かれた『ナチスの青年運動　ヒットラー青少年団（ユーゲントアルバイト）と労働奉仕団（ディーンスト）』（一九三八（昭和一三）年六月三省堂）をはじめ、四冊ナチス関連の書籍を著している近藤は、『輝ク』では四度その名を確認できるが、五八号（一九三八（昭和一三）年一月）にある長谷川春子らの噂話はかれの容貌をよく伝えている。
「ドイツから帰られた、国際映画協会の主事近藤春雄さんが、ドイツの統制のとれた集団の動きの話などから、お菓子やへいつても、ハイル・ヒトラーという事など話され、女性が、白粉ッ気なしで、いかにも血色のよい健康美であり、身なりが黒つぽいのに、帰朝つて見ると、非常時である国の銀座を歩く女性が、あまりにケバ〳〵しいと言つてゐられました。
　でせう、あの人にしてその言あり、キラビヤカなる銀座マンたつたのにね」

(35) 財団法人拓殖奨励館刊、一九三九（昭和一四）年三月。二五、二六頁。同誌は「海外発展と婦人特集」と銘打たれている。引用に際し、漢字は新字にし、ルビは省略した。

追記

本稿は「國學院大學國文學會・令和元年度春季大会」（二〇一九年六月二三日）での発表「大石千代子試論—リオ、ダバオ、日本—」と、アジア女性舞台芸術会議における「長谷川時雨研究会—『輝ク』を読む」ならびに現代女性文化研究所「「女人芸術」研究会（講師・尾形明子）」での報告とをもとにしている。参加された方に感謝いたします。
なかでも、尾形明子氏には、大石の御息女・椿原頌子氏をご紹介いただくなど特段のご協力を賜った。心より感謝いたします。